（１）下田小学校

学　　校　　長　上田　壮
校内研究代表者　石川　朗

1. 研究主題

「自ら課題を追求し、主体的に学ぶ子どもの育成」
～伝え合い、学び合い、深め合う算数科の授業づくりを通して～

２．主題設定の理由

昨年度は、下田小スタンダードに加え、授業改善プログラムの到達目標を意識して授業改善を行ってきた。導入を工夫し、見通しを持って個人思考や交流で考えを深め合い、自分の言葉でまとめや振り返りができる授業づくりを意識してきた。その結果、子どもたちが本時のめあてを設定し、主体的に課題解決に取り組む姿や、友達に自分の考えを説明しようとする姿が増えてきた。また、まとめや振り返りまで１時間で完結できる授業スタイルも定着してきた。また、高知県版学力調査では、4 年生 20.7 ポイント全国平均を上回り、5 年生は 6 ポイント前年度平均を上回り、「データの活用」の領域では、4 年生 10.2 ポイント、5 年生 12.3 ポイントと全国平均を上回り、データを考察する力がついてきている。

しかし、5 年生「数と計算」の領域で 8.5 ポイント、「変化と関係」の領域で 5.8 ポイント全国平均を下回り、弱さが見られる。また、じっくり話を聞くことや最後まで丁寧な作業を行うことなど、粘り強く取り組むことや、基礎基本の積み上げの部分に課題がある児童もいる。さらに、適切に言葉を使って、自分の思いを相手に伝えることが苦手だという児童も少なくない。

このような実態を踏まえ、今年度も、研究テーマ「自ら課題を追求し、主体的に学ぶ子どもの育成」は継続し、授業改善を進めることとした。そのため、授業の導入を工夫して、興味・関心を高めるとともに、「学習したことが生活や他の教科で役に立つ」と有用感をもたせられるような単元計画、授業設計を行い、学習への意欲を高めていきたい。指導にあたっては、既習内容をいかし、見方・考え方をはたらかせながら、教え合い、関わり合いのある、「分かる」「できる」授業づくりを行っていく。また、本年度も昨年度同様、算数科を研究の中心に置き、既習事項やキーワードを使って、自分の考えを式や図、言葉などで表現できる力を養っていく。さらに、読み書き計算の徹底と、加力学習の充実にも力を入れ、学力の底上げも図っていく。

３．研究の進め方と方法

（１）研究の進め方

①研究組織

・全体会（校内研究・職員会）
・研究推進委員会及び企画委員会・・・第１金曜日（校長・教頭・教務主任・研究主任・事務）
・ブロック・・・必要時（低ブロック…東、石川、河上）
（高ブロック…畠中、門田、酒井、小橋、濱口、福井、野並）
・部会・・・必要時
学力向上部（東、石川、門田　　）

生活指導部（畠中、河上、酒井、小橋、濱口、福井、野並　）

②授業研究

・全体研…算数２本

（指導案を作成。全体で事前研と事後研を行う。事後研には指導主事招聘。）

・事後研では、視点にそってKJ法でよかった点、課題や改善点を出し合い課題解決に迫り、次の授業に生かしていく。

・参観者は、授業後に授業参観者カードを記入する。

③水曜日午後の活用の仕方（14：50～16：30）

・第１週・・・職員会、生活指導研究・発表朝会等の反省

・第２．３．４週…研究主題に関わる研究

運営・・・司会者、記録者は席順で順番制とする。

推進・・・企画委員会が前回までの経過に基づいて研究の方法を提示する。

（２）研究主題具現化の視点

①授業改善への取組

・下田小スタンダード、授業改善プランを徹底する。

・指導事項の徹底

・見方・考え方を働かせた授業づくりの推進

・子どもの考えを引き出すための導入の工夫

・資質・能力ベイスの授業づくりに向けためあてとまとめの研究

・子どもの考えを「つなぐ」「広げる」「もどす」ことを意識した「学び合い」を取り入れた授業づくり

・学習計画を提示（見通しを持たせる）

・帯タイムや加力学習を活用し、「読み、書き、計算」の反復練習をする。

・情報活用能力をつけるためのICT機器を用いた学習活動の工夫

②言語能力の向上

⑴話す・聞く力

・班学習、ペア学習等で関わり合う授業づくり

・言語活動を取り入れた授業の展開

・話し方（聞かせること）の工夫

・発表朝会

⑵語彙力

・辞書の活用（全校一人一冊）　全校での辞書引きの実施

・課題図書の推進

・読む活動の工夫と積み重ね（並行読書・新聞の活用）

⑶書く力

・国語科「書くこと」の領域と関連付けた書く活動を設定する。

・授業の中で書く活動を多く設定し、教師間、児童間で評価し合う。

・グッドノート賞

・スクラップシートや学校新聞作り

４．今年度の成果と課題

【成果】

高知県学力定着状況調査において、四万十市比、西部教育事務所管内比それぞれで、4 年生算数(＋3.1pt，＋5.7pt)、5 年生国語(＋5.7pt，＋4.6pt)、算数(＋4.5pt，＋2.7pt)、理科(＋10.1pt，＋10.2pt)と多くの教科で平均を上回っている。下田小スタンダードに沿った授業づくりを行ってきたこと、各種学力テストや公開授業を通して各ブロックで方策を考え、取り組んできたこと、ロイロノートを中心に ICT 機器を活用して、文章と図、式をつないで考えさせることができるようになってきたこと、そして帯タイムや、放課後の加力学習を通して、基礎計算の反復練習や前学年と現学年の内容の復習ができたことの成果が表れたと考えられる。

【課題】

高知県学力定着状況調査において、四万十市比、西部教育事務所管内比それぞれで、4 年生国語(－1.2pt，－0.9pt)、算数平均以下 4 年生 1 名、5 年生 2 名と課題が見られる。

要因としては、校内研修等で確認したことを全校で徹底して取り組めていないことが挙げられる。まず 1 つはめあてとまとめについてだ。1 時間で学習してきたことが次の学習や実生活につながるような、資質能力ベイスのめあてとまとめを立てていく計画であったが、その問題や物語文・説明文の内容をまとめる内容ベイスのめあてとまとめに留まっている。2 つ目としては、子どもの主体的・対話的で深い学びを担保できたかということについてだ。授業の中でも、話す・聞く・書く活動を大切にしながら学習活動を進めていくように研究を進めてきたが、教師主導の授業展開になっていたり、子どもが問いをもてていなかったりすることで、受け身の子どもをつくってしまい、学力向上へとつなげていくことができなかった。

【来年度に向けて】

子どもが、学習課題に向かって、主体的・対話的で深い学びを行っていくには、前提となる生きて働く知識・技能の習得が必要である。算数科においては、45 分授業の中で、算数用語の意味を理解し、書いたり、話したりするときに教師も子どももこだわって活用していくことで、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成を図っていく。そのためには、焦点化された問いをもたせ、めあてとして全体で共通確認すること、算数用語を使いながら問題解決型の学習を行っていくことが重要となってくる。また、授業の中で見つけた、見方・考え方についても、その時間の授業だけで終わりにするのではなく、めあてとまとめに明示し、次時や次学年の学習につないでいくことで系統的に学習を積み上げられるようにしたい。

また、上記学力調査で唯一平均を下回った国語科においても、まずは学習指導要領を熟読して指導事項を確認し、1 つの単元を通してどのような資質能力を育成していくかというねらいを焦点化させ、適切な言語活動を設定していく。まとめでは、話し方・聞き方書き方、読み方などの言語活動の行い方をまとめていくことで、まとめたことを次の時間や他教科の学習、実生活につなげ、学力の向上を図っていく。

以上のことから、来年度は焦点化された問いをもつことができる導入、めあてとまとめ(①資質能力ベイス②見方考え方をつなぐ)の 2 つについて研究を進めていきたい。